

平成 16 年 4 月 26 日

< 4 9 5 3 学校教育専攻 佐々木 朗 >

教育心理学特論 レジюме

1. 購読した論文 「児童を取り巻く人間関係の問題」 1995

門田 幸太郎 (立命館大学助教授 産業社会学)

2. 論文の概要

本論文は、近年の社会の変化に伴う子ども達の変化 (主に負の部分) について、その概要と社会的な背景をまとめたものである。

社会構造の変化

戦後経済が急速に発展し、社会は第 1 次産業から、第 3 次産業へと変化した。その結果、職住一体の生活から、職住分離の生活となり、家庭が変化してきた。その結果、子どものあり方にも変化をもたらしてきた。

少子化

わが国の出生率は 1975 年以降低下の一途をたどっている。その理由の一番大きなものは、結婚しない女性が増えたことにある。また、子育ての費用、育児の施設・制度の問題などが挙げられる。一方、子育てに対する魅力を感じない女性が多くなったという統計もある。少子化の傾向は、少ない子どもへの過剰な期待、また、兄弟が少ないことに起因する対人関係への影響につながっていく。

遊び

子ども達の遊びが集団による外遊びから、テレビゲームなどの個人的な内遊びに変化してきている。その原因として、習い事に時間を費やされ、一緒に遊ぶ時間が少ないこと、また、テレビゲームなどの方が子ども達にとって魅力的なものになってしまったことが挙げられる。しかしながら、遊びは、対人関係を育て、生活能力を向上させるためには、どうしても必要なものであり、大きな課題である。

塾

塾通いする児童・生徒の数は近年大きな割合を示している。その背景には、学歴信仰が依然としてあり、幼稚園への入学試験などいわゆる「お受験」などの問題も抱えている。その結果、にも示したが、子ども達の生活から「ゆとり」を奪う結果にもつながっていく現実がある。

いじめ

いじめは昭和 60 年をピークに減少している。しかしながら、現在においてもいじめが存在するのは事実である。いじめには 冷やかしのからかい、仲間はずれ、暴力、言葉での脅し、持ち物隠しなどがある。子どもがいじめをする原因としては、子ど

もの側として、友達とうまく付き合えない、がまんすることができない、自分のことしか考えられないなどがあり、その他にも、学校の対応、親の養育態度、また、社会の要因も挙げられる。

登校拒否

学校ぎらいにより、欠席をする児童・生徒が増加を辿っている。腹痛や頭痛、食欲不振などの症状が見られる。原因として、母親の過保護、否定的感情などが横たわっているケースが多い。解決に向けては、「登校拒否は、子どもの自立への試み」ととらえ、子どもの自発的な行動が現れるのを待って、全面的に本人の意向に任せ切ることが大切である。(グラフは、いずれも文科省)

家庭内暴力

1960 年半ばから児童相談所などの関係機関で取り扱われるようになった。暴力の対象の過半数が母親である。また、年齢は中学生が一番多く、性別では男子が圧倒的に多い。家庭内暴力の原因として、本人の挫折や性格による場合、家庭でのかかわりに問題がある場合、社会に要因がある場合などが挙げられる。

父親

わが国においては、父は仕事、母親が日常的な子どものしつけという図式ができあがっている。諸外国と比較しても、子どもにとって、父親の存在は、希薄であるというデータがある。

離婚

離婚率は年々増加の傾向にある。原因としては、いろいろあるが、相手を一人の人格と認め、尊重する気持ちの欠如に起因している。離婚により、当事者も大きなストレスを伴うが、子どもにとっても大きな心の傷を負うことになりうる。

人間関係の問題点

わが国の子ども達が作っている人間関係の問題点には次のようなものが挙げられる。

エゴイズム～人との干渉を好まず、自分の世界を持つ(自分勝手)、直接体験をする前にマスメディアによる間接体験が先行してしまう、友人同士の連帯感や規範意識が欠如してきている、地域の教育力が欠如しつつある。

児童を取り巻く人間関係と学校教育との関わり

～学習指導要領に示すこれからの教育の目指すものと現場での学校教育について～

・内外を取り巻く社会情勢とこれからの教育のめざす姿

子ども達を取り巻く社会情勢は、望ましい方向に向かっているとは言えない。そこで、子ども達の現状をもう一度分析し、それに対応して、学校教育において、どのように取り組んでいくべきかを中央教育審議会の答<申文部省 審議会答申等（21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申））>をもとにまとめる。

(1) 子ども達を取り巻く社会と子ども達の生活の現状

戦後わが国は急速な経済発展をとげ、国民の生活水準が向上し、豊かな生活となった。子ども達にとっても、ものが豊富になり、高学歴を目指すようになり、食生活や生活習慣が変化したことから体格も向上した。

その一方、次のような現状が近年指摘されるようになった。第1に「ゆとりのない生活」である。放課後の塾通い(中学生では6割以上)や勉強、そしてテレビなどを見る時間が増え、睡眠時間が十分にとれず、眠れない、イライラする、食欲がないなどのストレスを感じる児童が多くなっている。第2に「倫理観の欠如」である。少子化に伴い兄弟が少なくなり、また、友達との付き合いも希薄化していることから、人間関係を築いていく力が欠如し、また生活経験や社会経験が不足していることから、子ども達にとって、「良い」「悪い」の倫理観が不足し、社会生活に適応できなくなりつつある。第3に「自立の遅れ」である。自分の部屋を片付ける、将来の展望を持つなどの自立精神が20年前の調査と比べても遅れている。第4に「健康・体力の問題」である。食生活の向上により体格的には向上が見られるが、肥満傾向や視力の低下、瞬発力、筋力、持久力、柔軟性などの低下している。これは、子どもの生活習慣、特に遊びの変化が大きく関与すると思われる。第5に「積極性の向上」である。従前に比べて、国際性や感性の豊かさなどについて優れているという報告があり、また、ボランティア活動など社会に積極的にかかわっていかこうとする気持ちが強くなっている傾向がある。

次に子ども達の生活と学校に目を向けてみる。小学生の9割、中学生の7割、高校生の6割は、おおむね学校生活に満足している報告がある。しかしながら、いじめや登校拒否などの問題事例も決して少なくない現状にある。

(2) これからの社会の展望

先進国として世界においても大きな地位を占めるわが国ではあるが、物質的には豊かであっても精神的に満たされない生活をしている現状がある。今後わが国は次のような課題に直面している。経済発展がもたらした負の部分について、これからのわが国の発展のため

めじっくりと考え直す時期に来ている。今後わが国は次のような大きな課題に直面していると考えられる。

第 1 に「国際化」である。情報化が発達することを背景に、今後益々、諸外国との付き合いが重要となってくるであろう。第 2 に情報化である。テレビ・ラジオなどのマスメディアをはじめインターネットに代表されるように、いつでもどこでもだれでも、情報を入手、発信できるようになってくる時代が来る。第 3 に「環境」の問題である。地球温暖化、オゾン層破壊など地球環境が大きく変化しつつある。大量生産・大量消費・大量廃棄を考えていかなければならない時期である。第 4 に「高齢化・少子化」である。ここ何十年か高齢化社会が続き、介護をはじめとする福祉の問題、また、少子化傾向の存続は国家を支える根幹を揺らがす問題ともなっている。

(3) 今後の望まれる教育あり方

以上のような社会や子どもの変化、また今後の社会の展望を鑑み、どのような力を子ども達につけていくかについて考察する。

教育の方向性として、2つの面から見ていくことにする。「不易」と「流行」である。時代を超えて代わらないものが「不易」である。思いやりをもつこと、人と協調していくこと、自然を愛すること、自国を愛することなどである。一方、時代の変化に応じて教育も変わっていくべき側面もある。それが「流行」である。教育は、時代の変化に無関心であってはいけない。特に情報化、国際化が進む 21 世紀においては、時代の要請に合う力を子ども達に身につけさせていかなければならない。

社会はめまぐるしく変化をし続け、国際化、情報化、高齢化、少子化とたくさんの課題を抱える中で、今後どのように進んでいくのかを明確に予想することができない時代を迎えている。

子ども達は、今までの知識だけで解決していくことが困難な場面に多々直面することが予想される。そのような社会を生き抜く子ども達には、自分で考え、解決していく力を身につけさせなければならない。つまり、自分で課題を見つけ、水から学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることが大切である。さらに、豊かな人間性ということで、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心を育てることも大切である。このような資質や能力が「生きる力」と呼ばれるものである。

(4) 生きる力を育てるための教育

学校・家庭・地域社会の連携

子ども達の全人格を育てるためには、学校だけでは不可能である。家庭や地域の教育力の低下が叫ばれる中ではあるが、子ども達が心豊かに健やかに成長するためには大人一人一人の責任にかかっていることを今一度自覚する必要がある。

生活体験・自然体験の増加

今の子ども達は生活経験に乏しい。テレビで疑似体験をしても実体験がないことが多い。子ども達には実際のものに触れて、また、生活のあらゆる場面にいろいろなことを経験させ、驚き、感動しながら、社会生活、自然を学んでいくことがあまりにも多い。

社会全体のゆとりの確保

子どもが多忙すぎるようであれば、生きる力は育ちにくい。親は子ども達に家庭や地域社会で過ごす時間を意図的にも生み出すことを考えていかなければならない。

学校がめざす教育

- ・ 知識を一方向的に教え込みになりがちだった教育から、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。(教師の意識転換が強く望まれる)
- ・ 生涯学習という観点で学校ですべての教育を終えようとするのではなく、基礎的な資質の育成を重視する。
- ・ 「ゆとり」のあり、楽しく仲間と学びあうことができる教育活動を展開する。
- ・ 教育内容を基礎基本に絞り、確実な習得を目指すとともに個性を生かした教育を重視する。
- ・ 子ども達一人一人のよさや可能性を見出し、それを伸ばす。
- ・ 豊かな人間性、専門的な知識を持った教育のプロとしての教員による指導を行う。
- ・ 「ゆとり」があり、高い機能を備えて学習環境を整える。
- ・ 特色ある教育活動を展開する。
- ・ 家庭や地域社会と連携を深めていく。

・ 本校における学校教育のめざす姿

経営の方針

子どものよさが輝く特色ある学校づくりをめざして

～ きのうよりいい顔いい声いい動き～ ～今日の充実を求めて

- (1) 学校教育目標の具現化をめざし、学ぶ側に立ち、創意ある教育活動の推進に努める。
- (2) 地域の特性を生かし、子ども一人一人に、生きる力を育てる教育課程の編成・実施に努める。
- (3) 教職員の経営参画意欲を高め、専門職としての資質向上を目指す研修活動の充実を努める。
- (4) 子どもの感性を大切に、豊かな心を育む学びの環境づくりに努める。
- (5) 家庭、学校、地域社会との連携・融合に努める。

経営の重点

- (1) 学校教育目標・学年目標の具現化を目指し、創意と調和のある教育課程の編成・実施に

努める。

- (2) 心豊かで、たくましく生きる力を身につける指導計画や指導内容、指導方法の工夫・改善に努める。
- (3) 学ぶ側に立つ教育を推進する分掌組織、業務内容等の合理化、効率化に努める。
- (4) 授業改善や危機管理意識高揚など実践に生きる研修の工夫に努める。
- (5) 教室環境の整備や特別教室の有効活用、校舎内外の環境整備に努める。
- (6) 地域の自然・人材・素材を活用し、地域に根ざした特色ある学校づくりに努める。
- (7) 国際理解教育の充実に努める。
- (8) 地域の文化・スポーツ育成との連携を通して児童の健全育成に努める。

指導の重点

- (1) 子ども一人一人の生きる力を育てる教育課程編成・実施に努める。
- (2) 意欲をもち、自ら学び自ら考える学習指導の工夫・改善に努める。
- (3) 豊かな体験を通じた道徳的实践力の育成に努める。
- (4) よさや可能性を生かし、自主的、実践的な態度を育てる特別活動の充実に努める。
- (5) 互いに認め合い、励まし合い、思いやる生徒指導の充実に努める。
- (6) 生命を尊重し、安全・危機管理能力を育成する健康安全指導の充実に努める。

・体験的学習の具体的実践の一例

平成 14 年に学習指導要領が施行され、その中で体験的・問題解決的な学習方法が重視されるようになった。本論文にもあるように、子ども達の体験不足は本校の児童においてもその傾向を感じる。そこで、本校の総合的な学習の時間では、各学年ともその発達段階に応じて、「私たちの郷土・七飯町」というテーマで、体験を多く取り入れながら、学習活動を行っている。

七飯町は、りんごの生産が大きな地場産業となっており、本校校区の高台にもりんご農家が点在している。3年生においては、地元の農家の厚意により、子ども達がりんごに袋をかぶせる体験をした。農家の方のお話を聞きながら、子ども達は、まだ青く小さいりんご一つ一つに慣れない手つきながらも、ていねいに袋をかけていった。

本校だけに限らず、現代の子ども達は、社会体験不足から地元の産業や体験についても未知であることが多く、学校教育において、意図的・計画的に郷土に根ざした体験的な学習を積極的に進める必要がある。そして、子ども達に、地元七飯町や北海道、そしてわが国を大切にする郷土愛や、愛国心を育てていくことが大切である。

この他にも地域の人材を活用した授業を行っており、地域の方々との連携を深めるよう努力している。

・話し合いの柱（こんなことをテーマに話し合ってみたらいかがでしょうか）

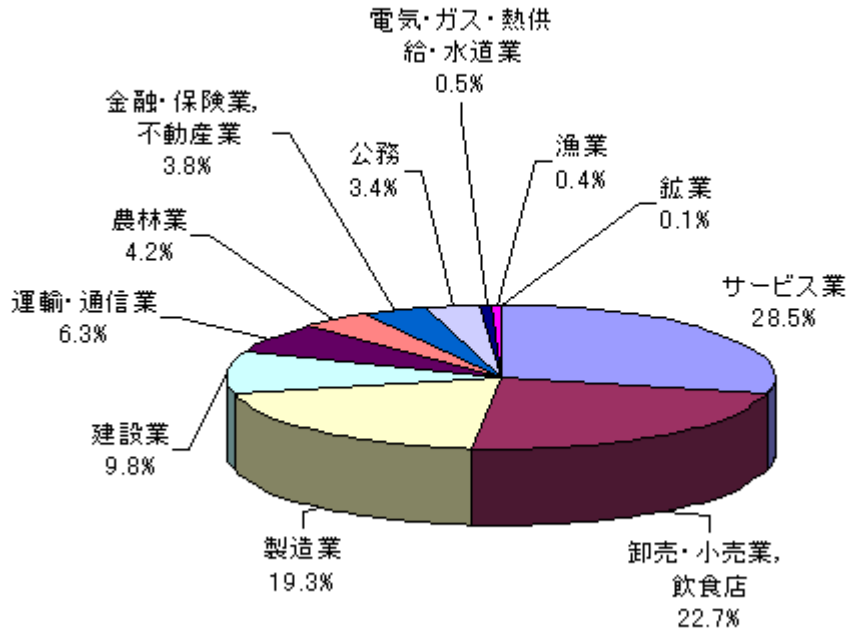
子どもの遊びの変化とそれに対する方策

社会の情報化と子ども達の変化

学校教育において、子どもの望ましい人間関係を作る手立て
家族の一員としての子どもにどう関わっていくべきか。

資料 1

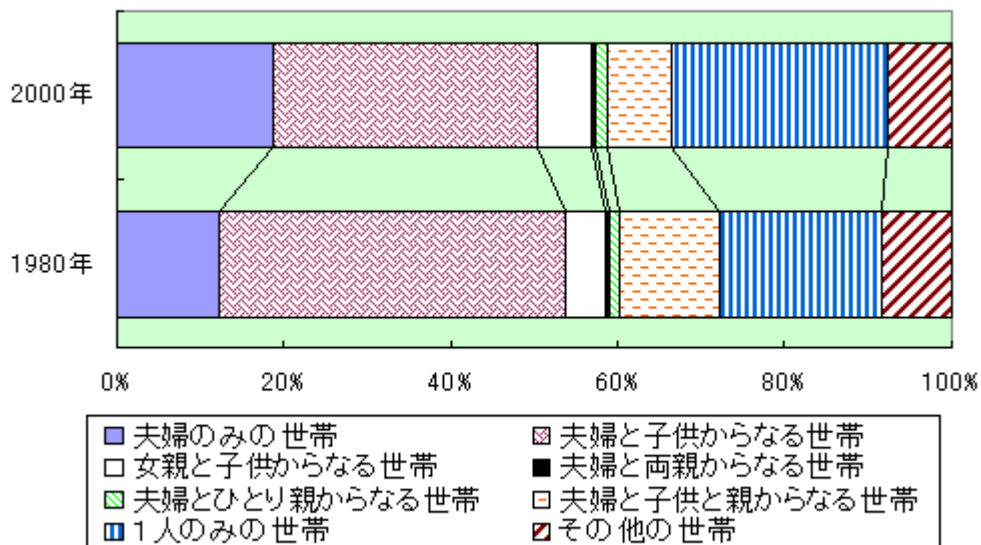
産業別就業者割合(2002年) - 全国



出典:「労働力調査年報」

資料 2

家族類型別一般世帯の割合(1980年・2000年)

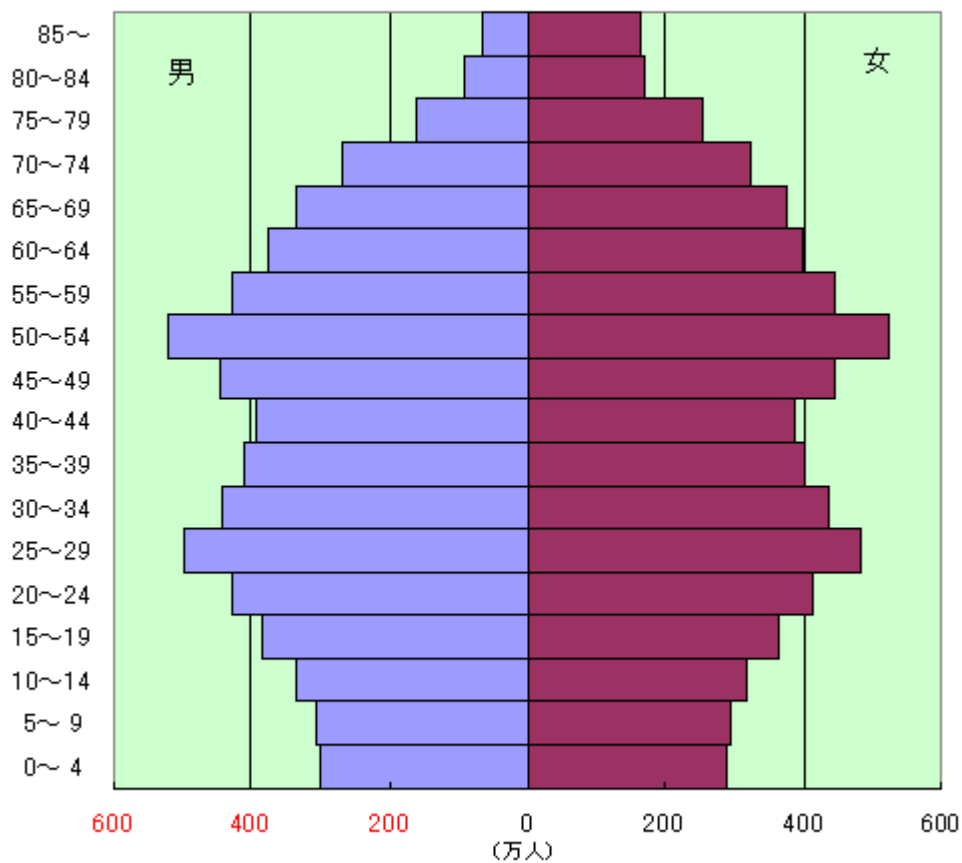


出典:「国勢調査報告」

資料 3

日本の年齢階級別人口(2000年)

(歳)

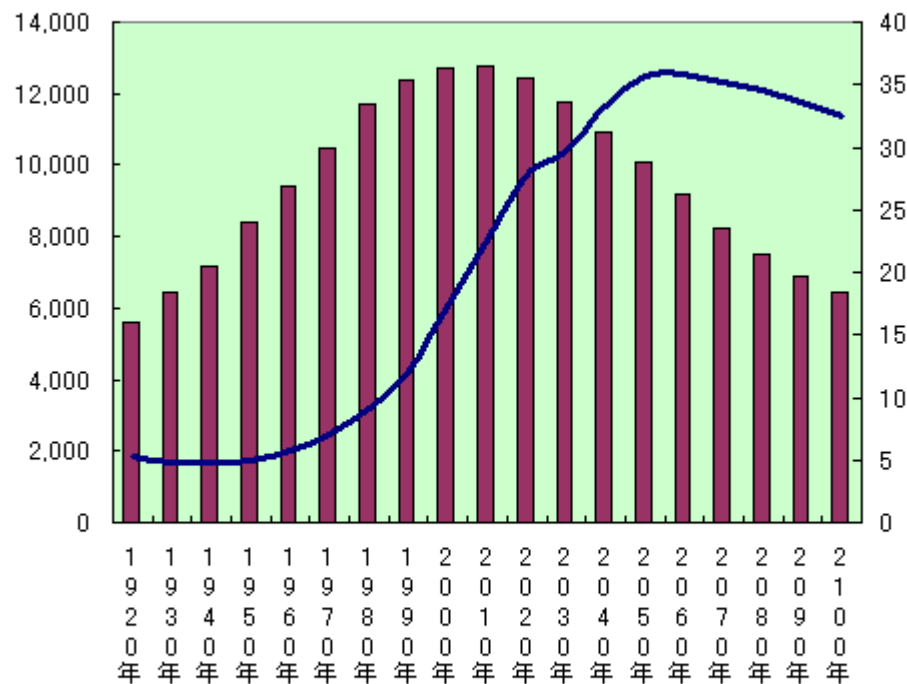


出典:「平成12年国勢調査報告」

人口の推移と将来推計人口-全国

総人口
(万人)

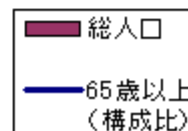
65歳以上
(構成比)
(%)



資料 4

注)2050年以降は参考推計です。

出典:「国勢調査報告」,「日本の将来推計人口」等

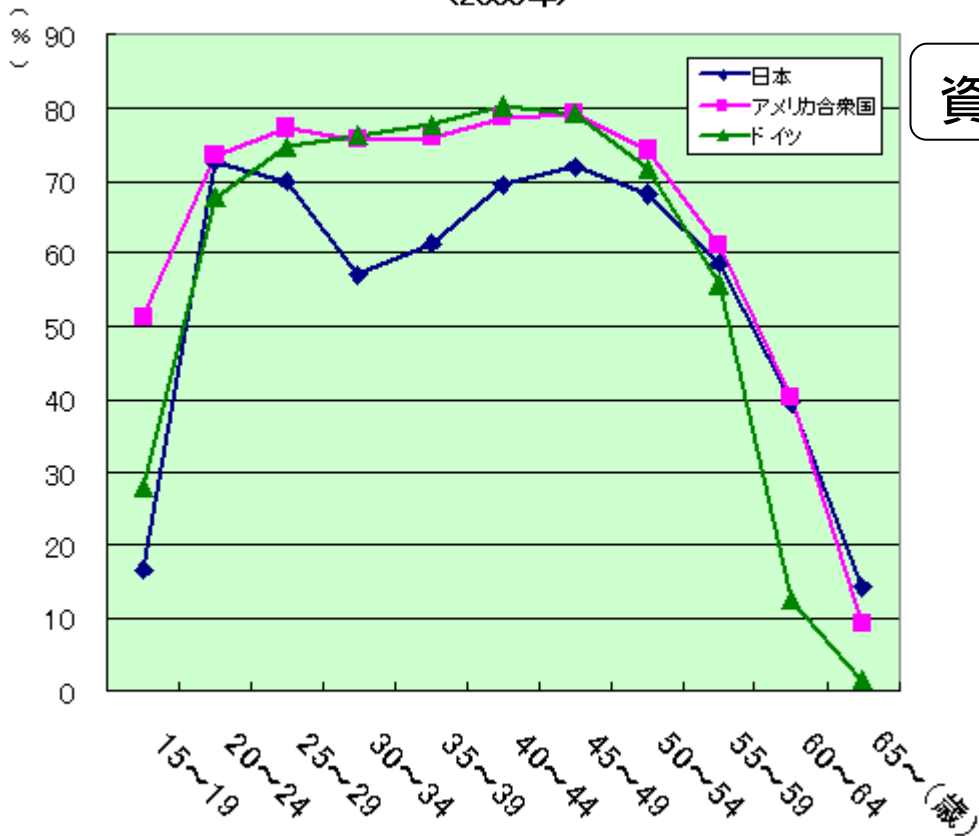


資料 5

第 1 - 21 表 出生数・出生率・構成割合, 年次×母の年齢階級別

年 齢	平成 8年 (1996)	平成 9年 (1997)	平成 10 年 (1998)	平成 11 年 (1999)	平成 12 年 (2000)	平成 13 年 (2001)	平成 14 年 (2002)
～ 14 歳	19	36	34	48	43	45	52
15～19	15,602	16,598	17,467	18,205	19,729	20,920	21,349
20～24	190,520	182,479	177,195	166,136	161,361	157,077	152,493
25～29	504,575	496,477	492,692	476,115	470,833	450,013	425,817
30～34	377,274	374,819	388,294	386,639	396,901	399,808	406,482
35～39	105,630	107,993	113,728	116,443	126,409	127,336	131,040
40～44	12,526	12,829	13,255	13,629	14,848	15,047	16,200
45～49	397	407	459	426	396	398	396
50 歳以上	-	3	3	6	6	4	10
不 詳	12	24	20	22	21	14	16
総 数	1,206,555	1,191,665	1,203,147	1,177,669	1,190,547	1,170,662	1,153,855

女性の年齢階級別労働力人口比率
(2000年)

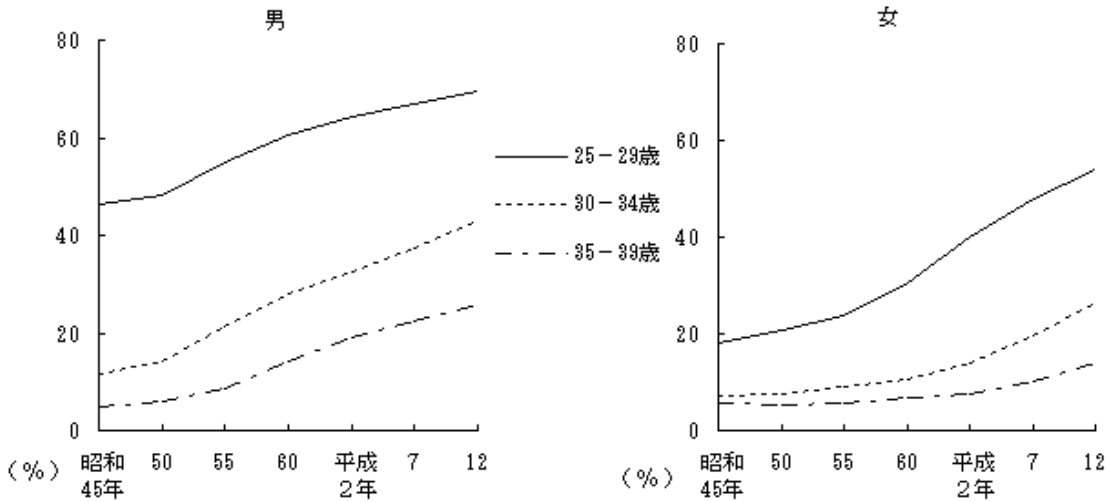


資料 6

出典:「Yearbook of Labour Statistics 2001」

資料 7

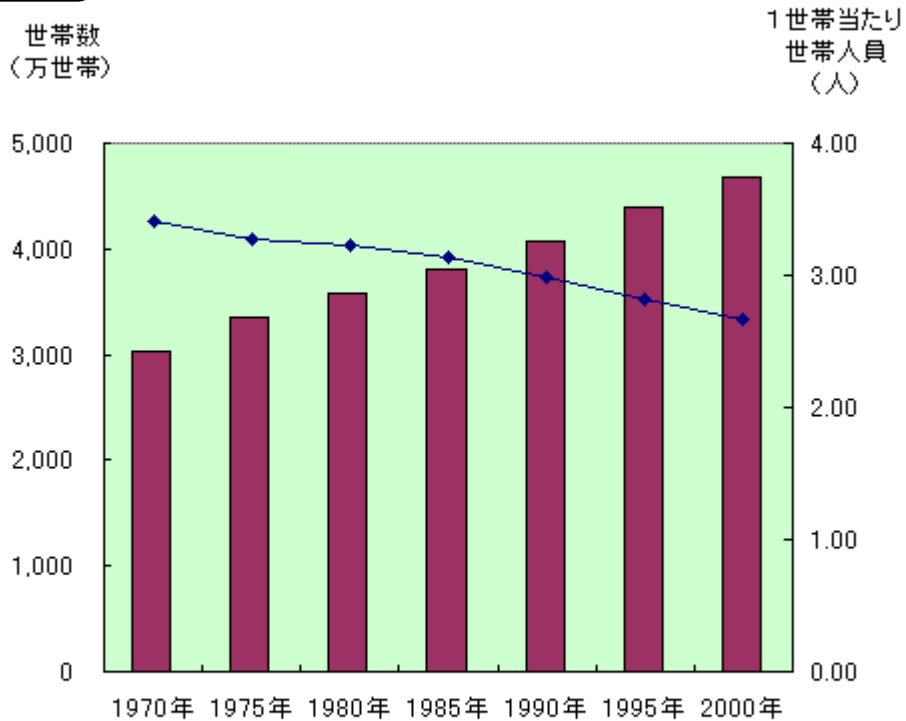
図 2 - 1 25～39歳における男女別未婚率の推移 - 全国（昭和45年～平成12年）



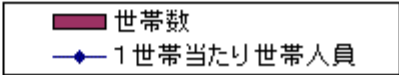
出典 「国勢調査報告」

資料 8

世帯数と1世帯当たり世帯人員の推移-全国

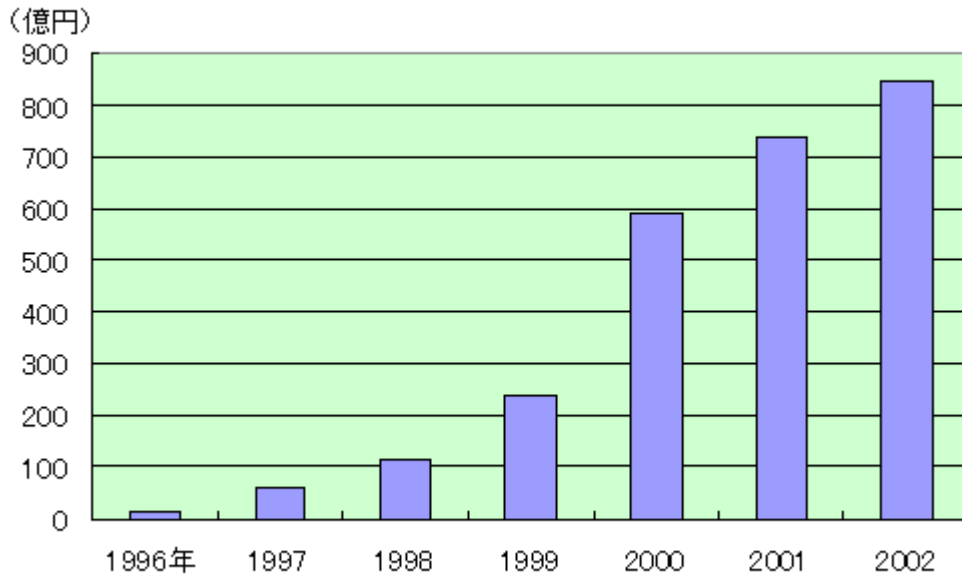


出典:「国勢調査報告」



資料 9

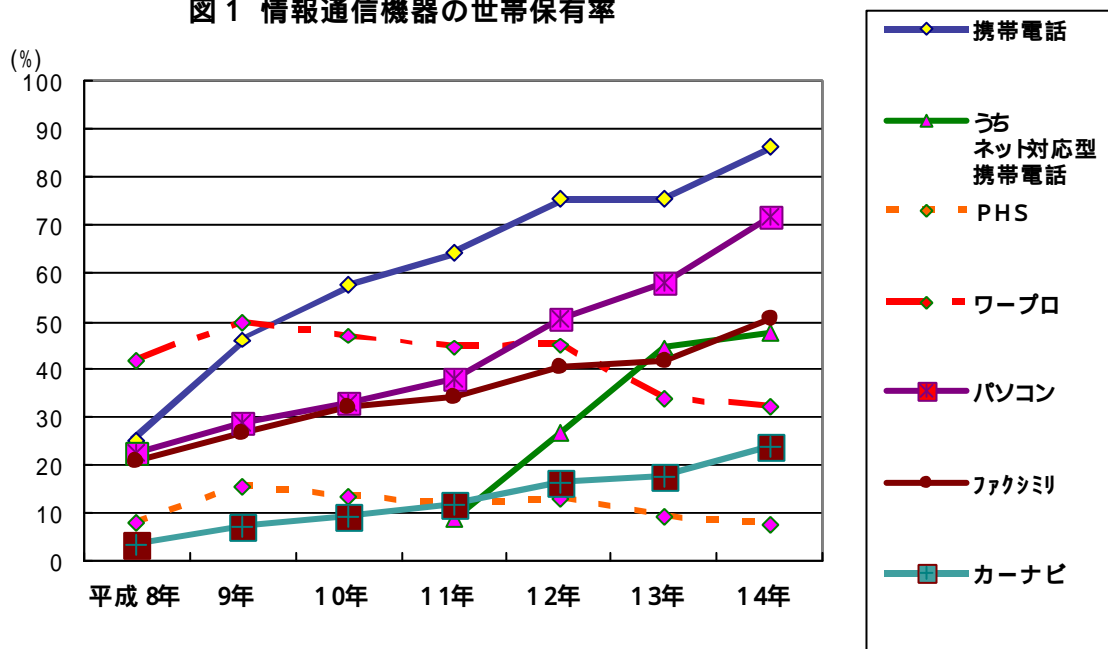
インターネットによる広告費の推移



出典:「日本の広告費」

資料 10

図 1 情報通信機器の世帯保有率



資料 総務省情報通信政策局 「通信利用動向調査報告書 世帯編」

資料 11

50 歳以上男子		50 歳以上女子		40～49 歳男子		40～49 歳女子	
遊びの種類	%	遊びの種類	%	遊びの種類	%	遊びの種類	%
ビー球	71.7	校庭遊び	73.9	山遊び	53.8	校庭遊び	94.8
メンコ	58.7	かくれんぼ	39.1	水泳	50.0	水泳	52.6
かんけり	45.7	かんけり	39.1	かんけり	46.2	かくれんぼ	52.6
ろくむし	43.5	ろくむし	34.8	釣り・魚捕り	42.3	山遊び	47.4
水泳	43.5	水泳	30.4	メンコ	38.5	かんけり	47.4
かくれんぼ	39.1	山遊び	30.4	ビー球	34.6	おにごっこ	31.5
山遊び	17.4	ボール遊び	21.7	かくれんぼ	26.9	遊具	26.7
ベーごま	17.4	ままごと	17.4	校庭遊び	23.1	ろくむし	26.3
ソフトボール	15.2	おにごっこ	17.4	ろくむし	19.1	ドッジボール	21.1
魚つり	15.2	ドッジボール	17.4	以下少数回答のため集約せず		ままごと	21.1

30～39 歳男子		30～39 歳女子		20～29 歳男子		20～29 歳女子	
遊びの種類	%	遊びの種類	%	遊びの種類	%	遊びの種類	%
野球・ソフトボール	75.0	校庭遊び	53.3	野球	64.7	校庭遊び	50.0
水泳	75.0	水泳	40.0	水泳	64.7	おにごっこ	50.0
山遊び	50.0	おにごっこ	33.3	サッカー	23.5	水泳	35.7
おにごっこ	45.0	山遊び	33.3	山遊び	17.6	かくれんぼ	35.3
かんけり	45.0	かくれんぼ	26.7	ドッジボール	17.6	ボール遊び	28.6
かくれんぼ	40.0	かんけり	26.7	おにごっこ	17.6		
ろくむし	40.0	ままごと	20.0	魚釣り	17.6		
ビー球	35.0	以下少数回答のため集約せず		以下少数回答のため集約せず			
サッカー	30.0						
メンコ	25.0						

10～15 歳男子		10～15 歳女子	
遊びの種類	%	遊びの種類	%
サッカー	49.1	おにごっこ	32.0
野球・ソフトボール	42.5	水泳	31.5
水泳	21.6	校庭遊び	25.5
おにごっこ	18.6	ドッジボール	22.5
かんけり	20.0	ボール遊び	17.0
ドッジボール	12.0	遊具	16.5
校庭遊び	12.0	一輪車	16.0
バスケットボール	6.6	かんけり	14.0
一輪車	5.4	バレーボール	14.0
山遊び	4.8	バスケットボール	8.0

	変化の見られる室内遊び	共通した室内遊び
50 歳以上	カルタ 花札 すころく 将棋 メンコなど	
40 歳	人生ゲーム 野球盤	工作 トランプ
30 歳	オセロなど (ボードゲーム)	ぬりえ 人形遊び マンガ
20 歳	テレビゲーム ビデオ カードゲームなど	テレビなど
10～15 歳		

資料 12

資料 1 1 および資料 1 2

出典 遊びの変化の研究 大平健太郎 真弓 楠本瀬梨香 中村 梢 広島県立大崎海星高等学校

<http://www.osakikaisei-h.hiroshima-c.ed.jp/9110-03kadai-folder/04-asobi-folder/kadai3.htm>